

キャサリン・ビーチャー姉妹の思想 と我が国での受容過程

碓井知鶴子*

本稿はキャサリン・ビーチャーとハリエット・ビーチャー・ストウ姉妹の思想が明治期の欧米文化移入期にどんな形でわが国に紹介され、受容され、あるいは変容していったのかという問題について論考し、またわが国の女性文化や女子教育への影響はあったのだろうかといった問題についても検討しようとするものである。

従来、明治『学制』期の啓蒙的女子教育思想は欧米の影響を受けたといわれながらその具体的思想の分析に欠けることが多かった。本稿ではその間歇を埋めることを目的として、ビーチャー姉妹著の『アメリカン・ウーマンズ・ホーム』の翻訳書等（『家事要法』・『通信教授女子家政学』）をさまざまな角度から検討した。とくに明治20年代にはキャサリン・ビーチャーの思想がキリスト教色を払拭して紹介され家事の合理性という側面のみを日本社会に定着させようとする傾向を「ビーチャー思想の日本化」として問題提起した。

〈キーワード〉 キャサリン・ビーチャー、ハリエット・ビーチャー・ストウ、『家事要法』、『女学雑誌』、『通信教授女子家政学』、異文化受容

I. はじめに

アメリカにおける女子高等教育発展の上で先駆的な役割を果たした女性教育家の一人であるキャサリン E. ビーチャー (Catherine E. Beecher, 1800-1878) とその妹のハリエット B. ストウ (Harriet Beecher Stowe, 1811-1896) はアメリカ近代女性史の上で重要な足跡を残した姉妹である。とりわけ妹のハリエット・ストウ著の『アンクル・トムの小屋』(1852) は奴隷解放運動の大衆化に大きな貢献をしたといわれ、その影響は女性史の枠を越えてアメリカ近代史に及んでいるといつてよい。現代のわが国でも『ストウ夫人』という名前や『アンクル・トムの小屋』という書名を知っている小中学生も少なくない。

このビーチャー姉妹が明治期の欧米文化移入期にどんな形でわが国に紹介されてきたか、そしてわが国の女性文化にどのような影響を及ぼしたかということについて関係比較的視点つまり「外国教育の受容と変容の跡の追及」(石附1992)¹⁾ という視角から考察するのが本稿の目的である。

II. ビーチャー姉妹について

(1) 家族的背景

キャサリン・ビーチャーは1800年ニューヨーク州、ロングアイランドのイーストハンプトンで生まれた。スミス (Page Smith, 1969) によると家族背景は以下のとおりであった。²⁾

まず、父親のライマン・ビーチャーは正統カル

* 岐阜大学教育学部

ヴィン派の聖職者で、新教徒の情熱にあふれ地獄の却火の恐怖について激しい説教をした。酒とカトリックを憎み、人類を改宗しようという情熱的な意欲を息子や娘たちに注ぎ込んだ。その結果子供たちは聖職者、教師、文学者として大成した。例えば、エドワード・ビーチャー(1804-1887)は高名な牧師となり、ヘンリー・ワード・ビーチャー(1813-1887)は優れた政治家でありまた著述家でもあった。さらにチャールズ・ビーチャー(1815-1900)は有名な著述家でありトマス・ビーチャー(1824-1900)も説教家であり博愛主義者であった。

キャサリン・ビーチャーは13人の男女の第一子として生まれ、11歳年下の妹がハリエット・ビーチャーである。ハリエットは1836年25歳の時父親が校長だった神学校でギリシャ語やラテン語を教えていたカリヴィン・ストウ教授と結婚した。1852年、41歳の時「アンクル・トムの小屋」を出版した。スミス(1970)はこの本が社会や政治に与えた直接的な影響からすればアメリカの歴史のなかで最も重要な文学作品であったとし、また奴隷制度の問題に対して国民的良心の形成に寄与したとしている³⁾。

姉のキャサリン・ビーチャーは10歳の時にアカデミーに入学したといわれているが本格的な学校教育は受けておらず、20歳のころ教師として自立したいという目的を持ち、ピアノや図画の個人教授を受けている。1822年-1832年にかけてコネティカット州ハートフォードに女学校を作って校長として働き、さらに1833年-1838年にはオハイオ州シンシナティに女学校を設立するなど女子教育家として成功した。さらに家政学を全米各地の大学に開設させる上で影響力を与え、また、大学・学校の門戸を女子に開かせるなど女子教育の発展に寄与した。

(2)キャサリン・ビーチャーのパラドックス

キャサリン・ビーチャー姉妹の書簡を編集出版したボイドゥストン(Jeanne Boydston 他, 1988)はキャサリンのキャリアを今日の観点から次のように総括している。⁴⁾

キャサリン・ビーチャーは19世紀半ばでキャリアの頂点に達しその頃はアメリカでもっとも有名な女性のひとりであり、彼女の生涯を二つのキャリアに分けて考える。

第一のキャリア：

最初は教師として、その後は女子教育振興の強力な擁護者として著名になる。(女学校の創設・家政学、算数、体育、道徳哲学などについての教科書の出版・女子が教職につくのを推進するための努力・アメリカ女子教育協会の設立など)。

第二のキャリア：

宗教・健康・家族生活・奴隷廃止論・女性の権利などのテーマについて著作活動に入り、そのことによって、19世紀中流階級のアメリカ人が自分自身と自分の世界について考えを形成する上で影響力をもつ者となった。ビーチャーはアメリカの家庭を社会からの避難所(a refuge from society)であるとするビジョンの形成を助けた。つまり彼女は20世紀終わりまで生き延びたジェンダー・イデオロギーの生みの親といえる。このことを通して彼女のインパクトはアメリカ文化と社会史に対して多大なものがあり、その点では第一のキャリアによって彼女の創設した学校の生徒であった数千人の女性に与えた影響以上に大きなものがあつたのである。

第一のキャリアよりも大きな影響を与えたといえる彼女の思想の核ともいえる「家庭は社会からの避難所」という論をボイドゥストン(1988)は当時の社会での積極的な意味合いと彼女の人生とのパラドックスを指摘している。つまり、ビー

チャーにとって女性の本来の仕事 (true business) の概念の中心にはジェンダーによって分けられた伝統的な世界観があった。男子は政治と仕事という乱雑で荒々しい分野を分担し、女性は家族生活に引き下がって母親として「人生のより優しい博愛行為」を統轄するというものである。南北戦争以前のアメリカにおいては「女性の場所」は女性の依存を意味した。女性の家事を「影響力と尊敬と独立とをオファーする職業 (プロフェッション)」に昇格させるというビーチャーの思想は伝統を強く押し動かすという積極的な主張の側面を持っていたのである。

しかるにビーチャー自身は母親として「人生のより優しい博愛行為」に従事した訳ではない。つまり彼女の言うことと行うことは矛盾していたのである。彼女は女性が男性を自然な保護者として頼るよう主張したが自分自身は男性に対して懐疑的であった。その上彼女のアメリカ人女性にたいするビジョンが狭いという問題点を持っていた。白人、中流階級、プロテスタントといった経験を前提としていたので19世紀のアメリカを裂いた階級や人種による分裂にチャレンジしなかったという点である。

さらに、ビーチャーの権威への情熱はビーチャー一族の血脈を流れていたものでありさらにリーダーシップをとりたいとする彼女の欲求は男性的野心であり、彼女の父ライマン・ビーチャーから学んだものである。彼女は家族の影響と当時の女性を限られた能力しかもたないとみなす社会のなかで自己のアイデンティティを一致させようと努力した人生であったという。

(3) キャサリン・ビーチャーのアピール

上にのべたように家事労働をプロフェッションに昇格させることによって女性の地位向上の戦略に

しようとする彼女の主張は当時の参政権運動の平等権論議とあい入れなかった。それ故彼女は1869年版のThe American Woman's Home (翻訳書名は『家事要法』, 後述) の最後部に「アメリカ女性への訴え」(AN APPEAL TO AMERICAN WOMEN)を付記し、そのなかで自分のキャリアと女性の現状を振り返りさらに彼女の目標を弁護した。彼女が訴えたかったことの要点を以下にまとめてみる。

① 過去40年にわたって同性の人格と条件の向上に努力してきた。あなたがたの助言と協力に頼って来し、今後も助力をお願いしたい。

② 女学校の創設と教育内容の変革

かつて教育者としてハートフォードで人生を歩き始めた時、ラテン語、幾何学、代数などを学ぶことが女性にとって何の役にたつのかと言って疑問を呈した保守的市民がいた。それにたいして善意と知性を兼ねそなえた女性への訴えが功を奏して目的をとげることができた。

③ 家庭経済を教科目として紹介

家庭経済を女子が学校で勉強する科目として紹介する試みは、しばらくの間うまく行ったようにみえたが、やがて政治経済学や他の経済学にとってかわられた。

④ 教職の紹介

東部諸州は教育を受けはしたものの職業としては教師の資格しかもたない女性があふれ、他方新興諸州では学校不足で勉強できない子供たちであふれていた。国内の女性に資金援助を求め、1000名におよぶ教師が西部諸州に送られた。

⑤ 女性の弱い体質と不健康

家庭と学校での適切な換気の不足、女性の体格に大切な家庭での運動、体に害のある衣服の流行、健康の法則を守らないことなどが女性の健康を一般的に崩壊させてしまった。頭脳と神経のオーバーワークや詰め込み式の勉強が知的発達を遅ら

せてしまっている。

⑥ 「アメリカ女子教育協会」の設立

女子教育の危険な傾向に驚いて、再び国内の女性にアピールして「アメリカ女子教育協会」(American Women's Education Association)を設立した。この組織の目的は、基本財産を持った職業学校(professional school)を文学系の学校と共同して作り、その学校では女性の職業(profession)は男性の職業と同じように敬われて教えられ、女性が自立できる仕事(ビジネス)の訓練を受けるべきところである。

⑦ 家事サービスへの嫌悪

家事はつい数年前まであった奴隷制度の烙印によって侮辱され外国からの家事手伝いの増加のため教育を受けた女性は家事サービスを嫌がる。家事をして賃金を得ることよりも女工や売春の方を選ぶものさえいる。

⑧ 家族の基盤を弱らせているもの：『自由恋愛』の教え、心霊論、いかがわしい連中の必死の誘いかけがなければピュアである数千の女性の貧困、これらすべての悪意ある影響が家族の状態の基盤を弱らせている。

⑨ 婦人参政権反対

女性を抑圧している大きな悪を克服するために女性に政治的権力と地位を与え、政治集会や政策委員会で女性グループを作ったり政治的ポストを争ったりするということは危険な争いの中に女性パワーを持ち込むということであり困惑なしに眺めることの出来る者はいないであろう、という立場をとっている。⁵⁾

キャサリン・ビーチャーは、上のように主張して自らの立場を明確に打ちだした。つまり、大多数の女性にとってその家事をきちんとやりこなすことさえ出来ないほど健康が犯され、虚弱である

というのに女性の選挙権や政治的活動に参加したりすることは賢いことではないというわけである。

このアピールを出した2年後の1871年に彼女は別の著書(『婦人参政権と婦人の職業』)でこの問題にふれ、もし選挙権を持てば、女性は男性の労働分野を規定する法律を立案する責任をもつことになり、また無知な女(アイルランド人の聖職者のいうがままになる)は汗水たらして働いた者の財産を奪う一票を投じるであろうと論じている。これは、キャサリン・ビーチャー以後の多くの婦人参政権論者たちの態度(汚らしい移民の群れとキリスト教徒で洗練された教育ある女性たちの目的を分離する)へと引き継がれていった。⁶⁾

上にみてきたように、キャサリン・ビーチャーは19世紀半ばにおいてすでにアメリカでの最も有名な女性であった。その彼女の代表的著作であるThe American Woman's Home(1869)が明治14年(1881)に『家事要法』として翻訳出版された経緯、訳者、教育現場への影響の有無などについて次に検討したい。

Ⅲ. キャサリン・ビーチャーのわが国への影響

明治14年に翻訳出版された『家事要法』についての先行研究は常見育男(昭和46, 昭和51, 昭和63)⁷⁾におう所が多い。とくに著者晩年の著作、「最初の家政学書・海老名晋訳『家事要法』の訳者海老名晋と訳書『家事要法』(明治14年刊)ならびに、原著者「カザリン・ビーチャー」Catherine Beecherと原典「プリンシプル オブドメスティックサイエンス」Principles of Domestic Scienceについての調査」(昭和63年)という長い題名の小論文集は訳者海老名晋について実に詳しい調査をしているのが注目される。

(1)『家事要法』について

明治14年3月に文部省編輯局から出版された本書はその序文において此の書の原本は1870年に米国ニューヨークにて出版されたものであると記されている。⁸⁾ 訳者海老名晋が用いたのは、1869年の初版本ではなく一年後のものであったということである。

本稿では、筆者の手に入れることができたのが1869年・初版本のリプリントであるから正確には『家事要法』の原本ではない。『家事要法』と初版本とを今ざっと比べてみても違いに気づく。例えば第29章から第35章までが『家事要法』では省略されている。また初版本では巻末に「アメリカ女性への訴え」(本稿、Ⅱ(3))「キャサリン・ビーチャーのアピール」参照)が掲載されているが、『家事要法』にはその翻訳はなく、その代わりに「本書ノ長記者同国女教師ニ與フル書」が掲載されている。ここではまず翻訳者のことから追及したい。

i) 訳者海老名晋について

まず、常見育男(昭和63)⁹⁾及び丸山信(昭和45)¹⁰⁾の先行研究によって訳者海老名晋の略歴及び訳書リストを紹介する。

略歴

- ① 弘化3年(1846)8月3日四屋鴻之進の次男として、日向国臼杵郡国富村延岡に生まれる。延岡藩士で学問教授である父から幼児より読書、習字を学ぶ。父(号は格斎)は篠崎小竹の門人で儒学を学び、また書を巻菱湖に学んだ。藩校である廣業館で教えた。
- ② 藩校で9年間、四書五経・史略・外史などを学ぶ。
- ③ 老父を助けて塾生に教授。この頃幼名四屋晋三郎を海老名晋と改姓。
- ④ 文久3年(1863)藩からの官費生として満1

カ年藩校の居家詰を命ぜられ、生徒の指導監督とともに幹事をつとめた。(18歳)

- ⑤ 慶応2年(1866)安井息軒の塾に入る。(1月～9月 21歳) 同年10月から翌年5月まで8ヶ月間欧州滞在(藩命?)
- ⑥ 慶応3年(1867)5月慶応義塾入社修行、明治4年辛未3月教授。「地理書並雑書素読」,「英文講学」担当。秀才のはまれ高く、英語の天才といわれ、福沢諭吉の愛弟子の小泉信吉とも親しかった。
- ⑦ 明治4年(1871)3月より5月まで、下総国・松尾藩主・太田氏英学塾へ出張。
- ⑧ 明治4年(1871)12月より同5年3月まで横浜・野毛町の高島学校へ出張。
- ⑨ 明治6年(1873)9月3日文部省八等出仕申付けらる。翌明治7年11月13日文部省出仕免ぜらる。(28-29歳)
- ⑩ 明治7年(1874)5月和歌山県士族小泉信吉の妹セキと結婚。
- ⑪ 明治10年(1877)1月27日岐阜県師範学校長(32歳), 同年6月21日病をもって職を辞任。
- ⑫ 明治15年1月15日妻セキ病氣にて死亡。
- ⑬ 明治15年(1882)紀州那智郡池田新町村伝法寺内・私立英修学校にて和漢洋の語学を教授。(37歳)
- ⑭ 明治16年(1883)9月23日病を得て郷里日向国延岡に帰る。(38歳) 以後高千穂高原や温泉、恒富町の浜部落で療養しながら藩校の改組した変則中学「亮天社」に職を得て指導。しかし病状の回復ははかばかしからず不遇であった。
- ⑮ 明治18年(1885)日向国東臼杵郡恒富村・農・川口平太郎長女シナと結婚。翌19年3月18日一子吉太郎誕生。
- ⑯ 明治31年(1898)2月30日死亡。(53歳)

訳書リスト (24歳～36歳)

訳書名・刊行年

著者・訳者・出版元

- ①旗章説略（明治2）
- ②化学大意（明治7） 2 卷 海軍兵学寮
- ③訓蒙叢談（明治6）（米）M・F・コウデリー
（上下）慶応義塾出版社
- ④訓蒙二種（明治7）（上下）四屋純三郎共訳
- ⑤日耳曼史（明治9）
- ⑥普通教育（明治11）
- ⑦百科全書第14冊（明治11）（英）W. チェンバース
（愛倫地誌） R. チェンバース
- ⑧家事要法（明治14）（米）（上下） 文部省

上の略歴及び訳書リストから浮かび上がる海老名晋像をまとめると次のようになる。幼時から秀才のはまれ高く、慶応義塾では英語の成績抜群でほとんど教員となって授業も担当。横浜の高島学校にも出講するなど、その前途は洋々としているように見える。明治6年、28歳の時「学制」期の文部省に八等出仕したことも出世コースに乗りはじめたことを伺わせる。当時の文部省には海老名のような語学力抜群の青年に期待するところは少なくなかったと考えられる。しかし何故か彼は文部省を1年2ヶ月で辞任している。さらに明治7年には小泉信吉の妹セキと結婚し、同10年、32歳で岐阜県師範学校に赴任しているが、これも病いのため半年たらずで辞任している。さらに5年後の明治15年には妻セキが病没するなど不運が重なる。以後彼は郷里日向国延岡に帰り病いを養いつつ後進の指導にたずさわるが病状の回復もはかばかしくなく不遇のまま明治31年53歳にて死亡する。維新时期には藩や国家に期待をかけられながら、病いに倒れて志半ばで終わった青年の姿が髣髴する。

海老名晋がなぜ、『家事要法』を翻訳するに

たったのか、その経緯や、海老名の思想的、宗教的背景などとの関連の有無は不明である。

- ii) 『家事要法』と教育現場

- a) 岐阜県師範学校との関係

『家事要法』は、明治14年3月に出版されているから海老名の岐阜県師範学校辞任（明治10年6月）から、およそ4年たらず経ってからのことである。その間彼は公職についた記録もないから、もっぱら、翻訳の仕事に従事していたものと思われる。一方岐阜県師範学校に付属女子師範学校及び普通女学校が設けられたのは明治12年8月であり、同13年9月には岐阜県第一中学校と合併して岐阜県華陽学校と称し、付属女子師範学校及び普通女学校を分離して岐阜県女学校となった。同18年には華陽学校に合併して華陽学校女子部となった。¹¹⁾ したがって、海老名晋が岐阜県師範学校を辞任してからおよそ2年後に付属女子師範学校と普通女学校が付設されているわけだから、彼が、岐阜県師範学校の女子教育に直接携わっていないことは明らかである。また海老名が去ったあとの岐阜県女学校で、あるいは華陽学校女子部で『家事要法』が教科書として採用されたという資料も今のところ、ない。海老名晋と岐阜県女子師範教育との接点の探求はなお今後の課題として残しておきたい。

- b) 「教科書」ではなく「参考書」として

『家事要法』は明治10年代の女子師範学校あるいは女学校で教科書として広く使用されたという形跡は見られない。常見（昭和51年）によると明治初期の教科書は生徒用というより教師用の教科書とみるのが妥当であり、『家事要法』も教科書ではなく教師用の参考書であり、内容が高度で科学的であるので、当時の教師にとっても十分使い

こなせるところまではいかなかったであろうと述べている。¹²⁾ 内容の高度であることに加えて、当時の女子教育方針の保守化傾向も本書を教育現場で使いにくいものとした要因であろう。

つまり本書の出版された翌明治15年7月には、文部省が東京女子師範学校予科を廃止して付属高等女学校を設置し女子教育が「学制」期の啓蒙的思想から保守的な徳育教育中心に転換している時期にあたる。しかるに、『家事要法』はその内容（キリスト教的ホームの形成、経済的で健康的でキリスト教徒らしい住居の構造と維持の手引き）から見ても「学制」期の啓蒙的女子教育思想に合致する度合いの方が大きい。上記の東京女子師範学校付属高等女学校では「教則大旨」が定められ、教科目の保守化と儒教女訓書が教科書に指定されており、内容的にはとても『家事要法』の入り込める余地がないといえる。¹³⁾

『家事要法』は文部省編輯局の出版であるにもかかわらず、当時の女子教育政策からは軌道をはずれたとくに位置していたといえるし、また明治初期からの女子教育関連の翻訳物教科書の最後を飾った大物翻訳書であったといえよう。これ以後は翻訳の匂いの少ないものか、翻訳書を種本としつつもぐっと日本の事情に基づいた利用のしかたをするようになっていくが、それについては後述する。

(2) アメリカ社会での評価

『家事要法』の原著初版(1869)の題名を副題もいれると『アメリカン・ウーマンズ・ホーム…経済的で健康的で美しくキリスト教徒らしいホームの形成と維持への手引きとしての家政学の原理』となり、著者はキャサリン・ビーチャーと妹のハリエット・ビーチャー・ストウの共著となっている。妹は協力はしたが実際は姉キャサリンが主と

なって執筆した。当時もっとも影響を与えた本の一冊だといわれ19世紀の家事の手引きの古典となったものである。その影響で家政学がハイ・スクール、女子大学、あるいは州立大学のカリキュラムに次第に浸透して行ったといわれる。さらに家政学への影響に加えて、女性の健康に関する関心が高まり、公立の学校では体育を必修科目にするのに力を貸したといわれる。

序論でビーチャーはこの本が1841年に出版した『家庭や学校の若い女性のための家庭経済論』

(A Treatise on Domestic Economy for the Use of Young Ladies at Home and at School) の増補版で28年後の本書ではそれ以後の新しい科学の成果などを加えた述べ、また『家庭経済論』は公立学校や高等女学校 (higher female seminaries) の教科書として広く使用されてきたと述べている。ビーチャーの『家庭経済論』の影響についてハイデン(Dolores Hayden 1981) は「ビーチャーは性の相違を誇張し、それによって家庭内での女性の役割に対する比重を変え、ロマン化した」というスクラーの指摘を評価している。

¹⁴⁾ ハイデンはさらに、ビーチャーの『家庭経済論』やそれ以後のビーチャーの書物が成功したのはビーチャーが家庭内では女性が優越しているという論を展開したからだと指摘している。¹⁵⁾ つまり当時の主流の考えかたは、男たちが女や子供を支配すると言う家庭像であったのだが、ビーチャーは「アメリカン・ウーマンズ・ホーム」のなかで女性は「自己献身というより優れた能力によって、家庭を支配する資格を得る」と論じてドメスティック・フェミニズムの提唱者になったといわれるのである。¹⁶⁾

家庭内では女性が男性よりも優越しているというビーチャーの思想が明治10年代の日本社会にどんな影響を与えたかについては、既述したとおり

『家事要法』のごく限られた使用方法（教員の参考書）を考えると社会一般に与えた実質的影響力はほとんどなかったのではないかと推測できる。

(3) 明治20年代とピーチャーの教科書

ーピーチャー思想の日本化ー

i) 明治20年代とキリスト教主義女子教育

明治初期のキリスト教主義女子教育は、主として欧米からの宣教師によるいわゆる「ミッション・スクール」として発展し、とくに明治10年代後半の鹿鳴館期に絶頂に達する。時あたかも条約改正の問題から端を発して、その欧化政策が露骨化していた。キリスト教はそのような当時の社会体制によって積極的支持を受けていた。そのためミッション・スクールは上流階層の学校の観を呈していた。その代表的な学校が東洋英和女学校であるが、当時の「教育時論」は次のように報じている。

「麻生鳥居坂上なる東洋英和女学校は、教師スペンサー婦人の尽力に依り追々盛大に赴き貴顕紳士の嬢子達にて同校に登る者既に百余人に及びしかば過日西洋風の教場をも新築していとも壮大に出来せり…」（第62号、24ページ）

このように隆盛を極めた鹿鳴館期のミッション・スクールも井上馨外相の欧化政策失敗を契機とした急激な世論の保守化の中で、とくに明治23年の教育勅語発布以後の国家主義的傾向の強化にともなって、キリスト教系ミッション・スクールの勢力が下降してしまう。

このような社会的風潮の保守化とキリスト教への仏教界からの反撃の中で、どこのミッション・スクールも学生数の減少への対応を考えざるをえなかった。例えば、神戸女学院在籍者は明治23年には189名であったが、明治27年には72名に減っ

ている。

ii) 我が国への土着化の努力

このような社会的趨勢の中で、ミッション・スクールはその本来の目的を軌道修正しはじめる。例えば上述の神戸女学院も創立当初は伝道者・教育者の養成を強調した教育目的から、より一般的な良妻賢母養成の目的に切り変えている。つまり、明治24年の「神戸英和女学校入学案内」には、「本校の目的は……キリスト教の道徳により智徳を併進せしめ他日良妻賢母たらしむる事を期す」とあり伝道者養成には言及しなくなってくるのである。このようにして多くのミッション・スクールが初期の強いキリスト教色を失っていくことによって日本社会に定着しないしは土着化をはかったのである。ミッション・スクールのこのような適応の仕方について、神戸女学院誌は自らを次のように弁明している。

「数百年来神仏習合になれた日本人にとっては、聖書と勅語との二重奏も西洋人が想像するほどには、耳にさわらなかった。二つのものの教義的關係を徹底的に迫及するよりも両者の長を採ってその実効をおさめるという功利主義も神仏習合以来のことである。」（『神戸女学院80年史』、107ページ）。

明治20年代はこのように、日本社会に根づくためにミッション・スクールが教育目的を修正したり、あるいは明治24年の立教女学校の大改革にみられるように学校経営とカリキュラムを日本化したりして、危機を切り抜け、さらに明治30年代に入ってから、公立高等女学校の教育目的と内容に準じたものとして自らを規定することにより、日本の土壤に定着しえたのである。

iii) 『家事要法』から『女子家政学』へ

ー明治20年代のビーチャーの読まれ方ー

a) ビーチャーの骨子に国情を併せる方法

明治20年代における日本社会はミッション・スクールを例にとりあげて上に見てきたように、欧米からの異文化の受容形態がそれ以前と異なり、如何にして日本の伝統的慣習や文化と折り合いをつけあるいは妥協して日本文化の中に根づくかという方途が模索された時代であるといえよう。

このような日本社会の背景のもとに、瓜生寅編述の『女子家政学』（明治22年刊）は生まれたのである。『女子家政学』は海老名晋訳『家事要法』を骨子として、瓜生が編術したものである。瓜生自身が総論の中でその立場を次のように述べている。

（我が邦には家政経済について）「まだ其事に明かなる婦人乏しく、偶々少しく所帯に功者なるものあるも道理に暗く学識なく其道を得ざるもののみ多く或は学者の蝶蝶として論じたるものもあれど只漠然たる儉約許のみにして眞に其道理を明にして書き記したるものとは更になし因て今米国の女学者ビーチャー氏姉妹兩人が著はせし家政学綱領といへるものを骨子とし傍ら西洋の家事経済書などの諸書を採り索て我邦の風俗に併せ考え聊か女子諸君の栞にも成るべき節節を書き陳ねんとす。」¹⁷⁾

「我邦の風俗に併せ考え」と瓜生が言うとおり、ビーチャーの基本的姿勢であるキリスト教徒らしいホームの形成という立場は見事に瓜生の著書から消えている。具体的に『家事用法』の目次と『女子家政学』の目次を突き合わせて見よう。

b) 両書の目次の比較

両書は章節の分け方、順序、各章の標題はほとんど同じで内容もこれに則って挿図も多くが同じで文章も海老名晋の『家事要法』よりもわかりやすくなっている。

また数ヶ所にわたって日本の風俗習慣をひきあいに出して比較検討しており、その具体的内容については後述する。まずは目次を比較したい。

（なお原著目次は1869年版に従った。）

『家事要法』 (原著目次名)	『女子家政学』
緒言	総論
1 基督教旨ニ適ヘル家族 (THE CHRISTIAN FAMILY)	家族の事
2 基督教旨ニ適ヘル家屋 (A CHRISTIAN HOUSE)	◎家作の事
3 養生法ニ適ヘル家居 (A HEALTHFUL HOME)	家内の健康を計るべき事
4 理学ニ基キタル通風法 (SCIENTIFIC DOMESTIC VENTILATION)	空気の流通法は学理に拠るべき事
5 竈爐及ヒ煙突 (STOVES, FURNACES, AND CHIMNEYS)	◎煖炉地坑烟突の造方及注意の事
6 房屋の粧飾 (HOME DECORATION)	◎家屋の修飾の事
7 健康ノ保全 (THE CARE OF HEALTH)	健康注意方の事
8 家庭ノ運動 (DOMESTIC EXERCISE)	家中運動の事

9 養生法二適ヘル食物 (HEALTHFUL FOOD)	◎食料の事	21乳児ノ看護 (THE CARE OF INFANTS)
10養生法二適ヘル飲料 (HEALTHFUL DRINKS)	飲料の事	22兒子ノ取扱 (THE MANAGEMENT OF YOUNG CHILDREN)
11清潔 (CLEANLINESS)	身体衣服を清潔にする事	23一家ノ遊戯及交際 (DOMESTIC AMUSEMENTS AND SOCIAL DUTIES)
12衣服 (CLOTHING)	◎衣服の事	24老人ノ看護 (CARE OF THE AGED)
13料理法 (GOOD COOKING)	食物調理の事	25奴婢ノ制御 (THE CARE OF SERVANTS)
14早起 (EARLY RISING)	早起の事	26病者ノ看護 (CARE OF THE SICK)
15家庭ノ禮儀 (DOMESTIC MANNERS)	行儀作法の事	27負傷及消毒法 (ACCIDENTS AND ANTIDOTES)
16管家者ノ温和ナル氣質 (GOOD TEMPER IN THE HOUSEKEEPER)	一家の主婦は性情温和を第一とする事	28裁縫 (SEWING, CUTTING, AND MENDING)
		29暖室及通風法 (WARMING AND VENTILATION)
		30無知, 無住, 無力, 不善者ノ救護 (CARE OF THE HOMELESS, THE HELPLESS, AND THE VICIOUS)
		31基督教旨ニ適ヘル隣里 (THE CHRISTIAN NEIGHBORHOOD)

(◎は日本の実情の分析あり)

(29～31章は原著の36～38章に該当する。) 次節にその内容の比較分析をしてみたい。

(以下の17章からは『家事要法』にあって「女子家政学」にはないため、子供の育て方、地域社会とのつながりなど ビーチャー思想の基本部分が欠落していることが、以下の目次を見ても明らかである。)

17結構順序アル習慣 (HABITS OF SYSTEM AND ORDER)
18賑恤 (GIVING IN CHARITY)
19光陰及貨産ノ節用 (ECONOMY OF TIME AND EXPENSES)
20精神ノ健康 (HEALTH OF MIND)

C) 『女子家政学』の内容検討

ア) キリスト教色の一掃

第一章の目次は、原著が「クリスチャン・ファミリー」であるのに対して『女子家政学』の方は「家族の事」となっている。その内容の項目を比較したい。

原著：第一章「キリスト教徒の家族」，家族国家の目的—年少者，弱者，無知な者を平等の地位に引き上げるための年長者と強者の義務—家族の規律—人間の兄として自己犠牲したキリストの例—低い身分を受け入れたキリスト—キリストの肉体労働—キリストのなりわい—家族国家の最高牧師としての女性—戸外ではたらきパンの稼ぎ手と

しての男性一名誉ある、健康で経済的で楽しくて
キリスト教徒としての家族生活の相互関係のなか
の労働と自己否定

『女子家政学』：第一章 家族の事、家族の本分
—家政は国政と異ならず—労働は幸福の基

両者の内容はその概要としては同じことをいっ
ているが、『女子家政学』の方では「キリスト」
という単語はみられず、それに代わって「天」と
いう表現が見られる。例えば（主婦は無知な者や
幼弱な者のために労力を借しまないようすること
を勧め、「假令へ婢僕の輩杯は他人の子なりとい
へども齊しく天より此邦に授け玉ひたる憐むべ
き人の子なれば決して等閑に為すべからず天の福
を穫んと思わば必ず自ら気を附て諸人を教へ育つ
べし」とある。¹⁸⁾

（下線は筆者）

通信教授用の教科書であるから、瓜生はごく平
易でこなれた日本語で書いているが、ビーチャー
が「キリスト」「クリスチャン」の語を頻発する
のに対応して、瓜生は「天の福」、「天の幸福」
という語を頻発している。これは瓜生が明治20年
代はじめの保守化しはじめた社会を鋭敏に反映し
ていると同時に、読者を意識して当時の通信教授
で学ぶ一般普通の女学生に受け入れられやすい表
現を用いたのであろう。

それにしても瓜生はビーチャーの宗教的発想を
理解していなかったのであろうか。あるいは、そ
の意味を理解しつつも自分流に意識したのである
うか。その典型的な例が次の箇所である。

原著：The family state then, is the aptest
earthly illustration of the heavenly
kingdom, and in it woman is its chief
minister.¹⁹⁾

（直訳：家族という国は天国をこの世に例示し
たものであって、その中で女性は最高
の牧師である。）

海老名晋の訳：

「人生居家ノ景況ハ恰モ天上ノ邦国ヲ地上ニ
寫出シタル者ナリ、而シテ其管當者（セワニ
ン）ノ首ハ則婦人ナレハ・・・」²⁰⁾

瓜生寅の訳：

「一家の政府も一国の政府と殊なることなし
一家の政府の總理大臣たるものはその家の
主婦なり・・・」²¹⁾

ministerという単語を瓜生は「牧師」ではなく
「総理大臣」と訳している。総理大臣と訳したこ
とで、ビーチャーの思想の宗教的側面は消え去っ
たことになる。しかし同時にビーチャーのいわゆ
るドメスティック・フェミニズムは確実に伝えよ
うとしたことがわかる。

イ）原著にない日本の実情分析の指摘例²²⁾

①住居について：住居は地面を高くして水はけよ
くする。間取りも便利よくして人の通り抜けとな
らないよう工夫する。日常生活で起臥するところ
は南向きにし、戸障子の建附を吟味し隙間をなく
する。トイレの便器は殖栗文造か前田善太郎の発
明したものを選び、臭気が外にもれないようにす
る。夜具は西洋人のように白い色を用いて汚れの
見えやすいようにする、等々。（第2章）

②空気の流通について：中等以上の日本風の家
には欄間や雨戸の上に明窓があって古来、空気の流
通を考えてのことであつたが、今の人はその利用
をしらない。その設けのないところでは雨戸2枚
づつに夢窓窓をつくるとか明窓のないときはすか

しの孔をあけるとよい。(第4章)

③改良竈について：友人宇都宮三郎氏の工夫したもので煙筒があって火勢も強く経済的でかつ煙りで屋内を汚すこともなく便利なので西洋風の暖炉を使用できない時はこの改良竈を用いるとよい。(第5章)

④室内装飾について：たとえ粗末なものでも色彩の配合や並べ方を考えれば室内の様子はきれいに見えるようになるから、西洋造はもとより、たとえば日本風の家屋でも色彩を和合させることが大切である。(第6章)

⑤食べ物について：アメリカには菜食を勧める者もいるが、これは肉類を過剰に取り過ぎることへの警戒であって、日本ではその逆で肉食が足りず、そのため身体が次第に小さくなり筋肉が軟弱になり忍耐力を乏しくし、活発でなくなった。これは仏法の過ちであり、このために我が国の元気を失わしめたことは計り知れないものがある。また、食品の成分分析は日本人研究者の著書(小鹿島、『日本食志』)を参考にして豊富な種類の我が国の食物を取り上げている。例えば豆腐については植物性蛋白質が豊かで卵、チーズなどの代りに用いられうる。豆腐に塩をまぜて調理すると、牛乳で作ったチーズに風味がよく似ていて西洋人も賞玩するという。(第9章)

⑥衣服について：頭は丸髷島田は重すぎるので脳を痛めるから束髪にするがよい。(西洋でも100年前までは重い髪のかき方であった。)また日本服一式と西洋服一式とを比較して前者は59円60銭、後者は34円70銭で経済的かつ品格も前者よりも優れると述べている。胸腹腰を圧迫するコルセット

は西洋でもいろいろ工夫されていると紹介している。

上に上げた日本関連の箇所は全部ではなく、ほんの一例である。瓜生はこのようにビーチャーの著書を骨子としつつも、当時の日本の社会的背景や読者層の教養レベル(通信教授を受ける者は高等小学校卒業程度)を考慮して日本の実情と改善策を提言したものと思われる。

ウ) 瓜生寅について

最後に、瓜生寅について一言したい。国語辞典には次のように紹介されている。「瓜生寅(1842-1913) 洋学者、実業家。福井藩出身。幕府の英語学校教授。維新後、文部省、大蔵省などに勤めたが、のち、実業界に転じた」と。

さらに、『大正過去帳』には、東京府士族多部五郎石衛門長男で天保13年1月15日に生まれ、大正2年2月23日逝去とある。外国船積仲立業を営み、所得税720 余円納む、と記されている。²³⁾

実業家としての後半生のことがここに明らかになったが、前半生の洋学者としての仕事については復刻『通信教授女子家政学』の解説(原田一)を要約すると次のようになる。

若いころ生地の越前から京都へ出て蘭学塾でオランダ語を学びやがて長崎に行きフルベッキに英語を学ぶ。

明治3年(1870)福井藩より上京、大学大助教、文学少博士に任ぜらる。(29歳)

明治5年(1872)「学制」起草者の一人。文部省刊行による翻訳書多数で、測地略、「学校建築法」などがある。「啓蒙知恵の環」「改正日本国尽」など教科書の著述もある。

明治6年(1873)大蔵省に移る。

明治10年(1877)官を退く。以後実業家となって

瓜生商会を起こし馬関商業会議所副頭取を勤む。²⁴⁾ き出でん気色あるなり。」(第40号, 明治19・11・5)

上に概略したように瓜生は前半生を啓蒙家として翻訳や著述に従事した。したがって彼は若いころから、翻訳書を我が国の実情に即して易しい言葉で紹介するという仕事に憤れていたものであり、明治22年出版の『通信女子家政学』の著述はいわば「昔取った杵柄」の最後の一振りであり、実業家の立場からのごく実学的関心からの女子教育論と位置づけられよう。

IV『女学雑誌』の女子改良論とビーチャー思想

これまでは主として、『家事要法』と『通信教授女子家政学』という二著を媒介としてビーチャー思想とわが国への影響を論じてきたが、この章では、鹿鳴館期の代表的な婦人雑誌である『女学雑誌』の中での女子改良論について論じてみたい。

(1) 巖本善治の女子改良論

自由民権運動がきびしい政府の弾圧に屈して、明治10年代後半には退潮期に入るが、それに代わって民権家の関心も社会改良問題へと移って行く。この頃の状況について『女学雑誌』主筆の巖本善治は次のように論じている。

(明治17年頃から政談論が低調になり)「形勢此時よりして一変し改良の議論やうやう世に出でたり。先づ女風の改良を論ずる者あり家屋衣食の改良を議する者あり。此に交際を洋風に改めたしと述る人あれば彼に宗教に改良を主張する人もあり髪を結び方を束髪に改めよとの議論盛んになりて足駄は靴の便利なるに替ゆべしと申す者もありけり。時勢斯の如くにして遂に今日此頃とはなりぬ。今日演劇改良, 衣服改良, 食物改良など言へるもの尚多く輿論を惹きて此後にも改良の議論更に続

巖本善治の筆による『女学雑誌』の中の改良論の例を下に若干挙げてみる。

社説「女服に改良」(53号, 明治20.2.26)

社説「女子職業の論」(60号, 明治20.4.16)

叢話「束髪之事」(61号, 明治20.4.23)

社説「婦人衛生会」(87号, 明治20.12.3)

批評「洋服案の討議」(128号, 明治21.9.23)

社説「衣服論」(162号, 明治22.5.18)

論説「食物改良論」(164号, 明治22.6.1)

社説「明治女学校生徒に告ぐ」

(207号, 明治23.4.5)

欧米の知識を引き合いに出しながら、巖本は伝統的な家庭生活改善を読者に勧めている。彼の文章の中に直接ビーチャー姉妹のことを引用しているところはない。しかし海老名晋訳の『家事要法』の出版された明治14年から瓜生寅の『通信教授女子家政学』の出た明治22年という8年の間に女子改良論が全盛期を迎えており、その意味では、ホームの合理化を説いたビーチャーの思想は明治10年代から20年代にかけての女子改良論の基盤として生きていたといえよう。

(2) 巖本の女性論とビーチャーの女性論の比較

ビーチャーの思想については既述のように女性性は自己献身によって家庭の「最高の牧師」(chief minister)となり熟練によって専門職(profession)としての家事に従事することによって権力を勝ちとるのだとするいわゆるドメスティック・フェミニズムの思想である。

それにたいして巖本の女性論を典型的に表現し

ているのが、上にあげた明治23年4月5日・207号の「明治女学校生徒に告ぐ」の中の次の言葉である。

「明治女学校の本願は諸子をして自由に発達せしめ、而して諸子が各自其好む所の途に達し、天賦の性を伸して、夫々に完きの女性とならるることを望むにあり。故に諸子が意見も、風采も、職業も、地位も皆な銘々に適する所の儘にして絶へて一形一模範たることを願はず、左れば卒業するものは、或は直ちに良妻賢母となり、或は女教師となり、或は看病婦となり、或は文学者、小説家となり、或は下婢となり、或は伝道師となるなど、皆一々其尤とも好む所ろ即ち其の尤とも適する所ろに達せんことを熱望す、毫末も強ゆる所ろなし、厘毛も、束縛する所ろなし。（中略）諸子は必らず清くあれ、必らず正しくあれ、必らず善くあれ、而して亦た他を愛し犠牲献身的の精神に充滿せよ・・・」

キャサリン・ビーチャーと巖本善治の共通した思想は献身的精神を持て、ということである。ビーチャーはその自己献身によって家庭の牧師になることを勧めたのに対して、巖本は、犠牲献身的の精神で充滿してさえいれば、どんな職業や意見を持とうと自由である、と主張している。巖本の女性観の方が社会により大きく、開かれているともいえるが、この点に関しては、今後、より精密な分析を必要とするものである。

V. ハリエット・ビーチャー・ストウの日本への影響－『女学雑誌』を通して－

これまで論じてきた『家事要法』や『通信教授女子家政学』の中でキャサリン・ビーチャーだけを著者であるかのように叙述してきたが、最初に

紹介したとおり、これは兩人の共著なのである。妹で作家であるハリエット・ビーチャー・ストウが協力をしたといわれているが、具体的にどんな協力をしたかについては明確ではない。

ごく抽象的にいうならハリエットの病身であることが、キャサリンの健康問題への関心をより探めるようになったという点で協力したといえるかもしれない。

既に見てきたように、『家事要法』には健康と衣食住の関連についての考察が全編を貫いている。前節で述べた女子改良論が衛生改良の思想や運動と結びついているのも、『家事要法』と一致している。（もっとも有名なのが、私立大日本衛生会（明治20年10月23日）で、衣服洗浄法、食物調理法、住居清掃法、育児法、看護法などの研究による生活改善運動をした。）²⁵⁾

ハリエット・ビーチャー・ストウがキャサリン・ビーチャーの著作の陰の協力者としてではなく、世界的に有名な小説家としてわが国に紹介されたのは、やはり『女学雑誌』においてであった。それを次に紹介する。

海外女事：

「彼のアンクルトムスケービンと云へる世を聳動したる小説の著者ハルリエットビーチェルストウ夫人は追々に年も老け行き特に良人の死したるのちは勢気大に衰へたるようにて最早老先は短かかるべしと云ふ（後略）」

（79号，明治20.10.8，180の5ページ）

外報：

「ビーチェルストウ同嬢は重病にかかり余程危篤のよしにて掛念したる所最早全快して例の如く筆を執るる由也。」

（144号，明治22.1.12，54ページ）

佳傳：

「女小説家ストウ女史の傳—米国にてオンクル
トムスケービンと云へる高潔の小説を著わし、
大に非奴隷の輿論を動かして遂に此の悪むべき
制度を全禁せしめたる、女小説家ハリエット、
ビーチャー、ストウ女史の傳記は、女流の小説
家頻々として現出する今の日本社会に於て甚は
だ價ある教となるべし。然るに『梅花余香』第
一輯にボルトン女史の筆に係る右傳記を譯述し
たるものあり、文字清く且つ有力なるが故に則
はち左に轉載して本誌の讀者諸君に示すと云ふ
…（以下略）」

（154号、明治22.3.23、308ページ）

女報：

「ビーチェル、ストウ、彼のアンクル、トムス、
カビンの著者ストウ夫人は今年80才にて、過日
其第八十回誕生記念を催ふし、人々之を祝した
るに、夫人は全く此日を忘れ居たり、至って健
やかなれど餘程老ひ玉ひたり。」

（282号、明治24.9.12、181ページ）

アンクル、トムス、ケビン：

「ビーチャー、ストウ夫人が子、近頃ろ其母の
傳記を一つの大なる美本にして著はし、世に示
せり。中に、彼の全世界を驚かせ、泣かせたる
秀麗の小説の出で来し因縁を記す。ストウ夫人
自ら此の小説の事を、左の如く言へりとは傳す、
此の書は、昔し生きて死し、今も永遠も生き玉
ふイエス、キリストが、貧しき者卑き者の上に
今も尚母の如き慈愛を懷き玉ひ、如何なる人も
エス、キリストが腰を屈めて之を助け玉ふこと
の出来ないほどに墜落することなしとの理はり
を、示さんとて書記しぬ。」

（302号、明治25.1.30、674ページ）

ストウ夫人の逝去：

「アンクル、トムス、ケビンの著作を以て、巾
幅の織手、よく十九世紀欧米の天地を震動した
るハリエット、ビーチャー、ストウ女史は、本
年六月十四日を以て其八五歳の高齡に達せしが
越えて数日七月一日溘焉として、其ハートフ
ォード市の私宅に逝けり。世界の文星また其一
を墜す、哀しい哉」

（425号、明治29.8.25、42ページ）

ストウ夫人が半面の歴史（アンクル、トムス、ケ
ビンの來歴）

（425号、明治29.8.25、8～11ページ）

上の記事からその特徴をまとめよう。

(1)長期にわたる掲載　一知名度の比較—

明治20年から明治29年にかけて10年間にわた
って7回、ストウ夫人の動静、あるいは、伝記が掲
載されている。この期間は彼女が76歳から85歳の
時期にあたり、新しい動きはみられないものの日
本の読者にストウ夫人の名前を広めたであろう。

一方、姉のキャサリン・ビーチャーは明治11年
にすでに死亡しているので、その著書「アメリカ
ン・ウーマンズ・ホーム」が明治14年に海老名晋
によって『家事要法』の名で翻訳出版された時は
すでに死亡後3年たったこともあり、また10
年代前半には『女学雑誌』に匹敵するようなジ
ャーナリズムの発達もなかったため、一般社会に
彼女の名前が広まることもなかった。実際的な影
響力はキャサリン・ビーチャーの方が多かったと
考えられるが知名度では、妹のストウ夫人の方が
まさるのは上のような事情からである。

(2)女流小説家志望者に刺激

明治22年3月23日号に伝記を掲載しているがそ

の序言に「女小説家ハリエット、ビーチャー、ストウ女史の傳記は、女流の小説家頻々として現出する今の日本社会に於て甚はだ價ある教となるべし」という箇所がある。時あたかも明治21年には三宅花圃が「薺の鶯」を発表して世間の注目をひいていた。花圃と中島歌子の歌塾で同門であった樋口一葉が生活のために筆をとる決心をして半井桃水に師事したのも明治22年、18歳の時であった。ストウ夫人についての伝記は国内の文学少女たちに刺激を与えたことが推測される。

(3)文学と家政学とキリスト教受容の問題

明治20年代の瓜生寅が出版した『通信教授女子家政学』では原著者のビーチャーが「キリスト」と記しているところは、すべて「天」という言葉に変えていることを既に論じた。「天」という言葉はキリスト教でも当然用いられているが伝統的な儒教思想にも使われる言葉である。明治20年代という保守的風潮の中で瓜生が「天」を使ったのは、「キリスト」という言葉を避けることによって、家事の合理性というビーチャーのもう一方の特性を日本社会に定着させたいとの願いがあったと考えられる。

それに対して上の明治25年1.30(302号)の記事はストウ夫人がアンクル、トムス、ケビンを書いた動機を明確にキリスト教との関連で述べている。

一方が通信教授用の教科書であり、他方がキリスト教に寛容度の高い『女学雑誌』であり、その性格と目的に違いがあるにしろ、抽象度の高い文学のジャンルと極めて実学的な家政学を比較すると、日本での受容の仕方は少なくとも文学の方がよりストレートであったといえよう。

VI. 結びに代えてービーチャー思想と現代ー

キャサリン・ビーチャーとハリエット・ビーチャー・ストウの思想はアメリカにおいては、19世紀前半から現在にいたるまで議論の対象となっており、それ程までに影響が大きかったことを物語っている。特にハイデン(1984)の「3つの家庭のモデル」は注目に値する。ハイデンによると1870年から1930年までのあいだに、家庭の改善のための3つの主な方策ーキャサリン・ビーチャーによる安息所方策(本稿Ⅱ(2)参照)、マルクス主義者による産業方策(ベーベル)、マテリアル・フェミニスト(メルシナ・フエイ・パース)による近隣方策が打ち出され、ビーチャーの安息所方策は家事労働を市場経済の枠外に置こうとしたことで破綻していった、と論じている。²⁰⁾

しかし、だからといってアメリカでもビーチャーが一世以上も前に主張した性によるステレオタイプ化が完全になくなったりはしていない。いやむしろ、家事をめぐる男性の参加はいまなお大きな問題なのである。わが国においても事情は似ている。ビーチャー思想の克服は今後の課題なのである。

引用文献

- 1)石附実(1992)「世界と出会う日本の教育」教育開発研究所, p. 133.
- 2)スミス, (ペイジ・スミス1969)「アメリカ史の中の女性」(東浦めい訳1977)研究社出版, pp. 149-152.
- 3)スミス, 同上, p. 152.
- 4)Boydston/Kelly/Margolis(1988):The Limits of Sisterhood-The Beecher Sisters on Women's Rights and Women's Sphere-,The University of North Carolina Press, pp. 13-20.

- 5) Beecher, Catherine & Stowe, Harriet Beecher (1869): *The American Woman's Home or Principles of Domestic Science, being a Guide to the Formation and Maintenance of Economical, Healthful, Beautiful, and Christian Homes*, (Reprint Edition 1971 by Arno Press, New York), pp. 463-470.
- 6) スミス, 同上, pp. 184-186.
- 7) 常見育男 (昭和46) 「家政学成立史」 光生館
常見育男 (昭和51) 「家庭科教育史増補版」 光生館
常見育男 (昭和63) 「最初の家政学書・海老名晋訳『家事要法』の訳者海老名晋と訳書『家事要法』(明治14年文部省刊)ならびに, 原著者「カザリン・ビーチャーCatherine Beecher と原典「プリンシプル・オブ・ドメスティック・サイエンス」 Principles of Domestic Science についての調査」
- 8) 田中ちた子, 田中初夫共編 (1970) 「家政学文献集成続編明治期第二冊」 渡辺書店 pp. 1-185.
- 9) 常見育男 (昭和63), pp. 13-25.
- 10) 丸山信 (昭和45) 「福沢諭吉とその門下書誌」 慶応通信, pp. 82-83.
- 11) 「岐阜県教育五十年史」 (昭和56年) 第一書房, p. 349.
- 12) 常見育男 (昭和51年), p. 166.
- 13) 深谷昌志 「良妻賢母主義の教育」 黎明書房, p. 81.
- 14) ハイデン; ドロレス (1981) 「家事大革命」 (野口美智子他訳, 1985), 勁草書房, p. 71.
- 15) ハイデン; 同上, p. 71.
- 16) ハイデン; 同上, p. 71.
- 17) 瓜生寅 (明治22) 「通信教授女子家政学」 (復刻家政学叢書1, 昭和57年), 第一書房, pp. 8-9.
- 18) 瓜生寅 (明治22), 同上, p. 13.
- 19) Beecher, Catherine & Stowe, Harriet, Beecher (1869): 前掲書, p. 19.
- 20) 田中ちた子, 初夫共編 (1970) 前掲書 p. 5.
- 21) 瓜生寅 (明治22), 前掲書, p. 13.
- 22) 瓜生寅 (明治22), 同上書, pp. 55-60 (第2章), pp. 126-127 (第4章), p. 143 (第5章), p. 196 (第6章), pp. 277-278, p. 295, p. 327 (第9章) p. 401 (第12章)
- 23) 稲村徹元, 丸山信, 他編 (昭和48) 「大正過去帳」 (物故人名辞典), 東京美術, p. 11.
- 24) 瓜生寅 (明治22) 前掲書, (『通信教授女子家政学』解説 (原田一), pp. 3-10.
- 25) 千野陽一 (1979) 「近代日本婦人教育史」 ドメス, p. 48.
- 26) ハイデン (1984) 「アメリカン・ドリームの再構築」 (野口美智子他訳 1991), 勁草書房, pp. 90-110.